

主 題：試練が与えられるわけ
聖書箇所：ヤコブの手紙 1章1－2節

今日から私たちはヤコブの手紙を学んで行きます。恐らく多くの皆さんにとって好きなみことばのひとつかもしれません。私たちの信仰が成長して行くために、非常に大切なことが記されている書です。

みことばを見る前に、まずこの手紙を書いた**ヤコブという人物について**考えて行きます。私たちはいろいろなところから、このヤコブについて知ることができます。

歴史的文献によって：古代ローマの司教であったエウセビオスという人が、2世紀初頭の著作家であるヘゲシポスという人の書いたものを用いてヤコブのことをこのように表現しています。「私たちの主の兄弟であるヤコブ、同じ名前の人がたくさんいたので、主の時代から今日に至るまで、ユストという別名でも呼ばれているが、彼は使徒たちとともに教会の統治権を拝受した。彼はぶどう酒も強い酒も飲まず、動物の肉を慎んだ。頭にかみそりを当てたことは一度もなかった。また、からだに油を注いだこともなく、風呂にも入らなかった。羊毛は着ず、上等の亜麻布の衣を身にまとっていた。彼はひとりで宮に入る習慣があり、人々の赦しを乞うてひざまづいている光景がよく見られた。彼はいつも神の前にひざまづき祈りをささげていた。その結果、膝小僧はらくだの膝のように硬くなっていた。そして、並外れた義の故に、彼は預言者たちが彼について言っているように、ユストまたはオブリアス、つまりギリシャ語で「人々の砦」と呼ばれていた。」。これだけ見てもこのヤコブという人物の姿が目に見えられます。霊的なリーダーでした。主を愛し主に従った人物の一人であったということを見ます。祈りの人であったといわれますが、私たちの誇り、模範とするべき信仰者の一人であったことは明らかです。ヤコブは後に殉教して行きます。そのことも文献が明らかにしています。ユダヤの歴史家のヨセフスという人物は、それについてこのように記しています。「大祭司のアンナスⅡ世は裁判のためにサンヘドリン、つまり議會を召集し、彼らの前にキリストと呼ばれたイエスの兄弟で、ヤコブという名の男とその他の人々を引き出し、彼らは律法に違反していると告発し、彼らが石打刑に処せられるように引き渡した。」と。だから、ヤコブは石打刑を受けて殉教していったのです。

聖書から：いろいろな人が彼について証言しています。たとえば、イエスが育ったナザレの町の人々はこのように言っています。イエス・キリストがナザレの町で働きをしたときに、人々はイエスの働きを見て驚きました。彼らはこう言います。マタイ13：55「この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。」と、イエスが育ったナザレの町の人々は、ヤコブはイエス・キリストの兄弟であると言っています。イエスの兄弟がこの手紙を記したわけです。使徒ペテロもこのように言っています。ペテロは囚われていたのですが、そこから天使によって解放されて自由の身となったペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行くのです。そこにはたくさんのクリスチャンたちが集まっていたからです。そして、入り口の扉をたたき、ロダという女中が応対に出てきたことが、使徒の働き12：12から記されています。彼らの前に立ったペテロは、17節にあるようにこう言っています。「しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください。」と言って、ほかの所へ出て行った。」、ペテロはヤコブの名前だけを挙げています。ということは、ヤコブはエルサレムの教会において重要な働き人、教会のリーダーの一人であったことを伺い知ることができます。使徒15章を見ると、教会の會議がエルサレムで行なわれた記事があります。エルサレム會議といわれるものです。そこで大切な問題が話し合われ、パウロとバルナバが異邦人の間でなされた神のすばらしいみわざを証言しました。二人が話し終えたとき、ヤコブはこんなことを言っています。15：13「ふたりが話し終えると、ヤコブがこう言った。「兄弟たち。私の言うことを聞いてください。」、この箇所からヤコブはこのエルサレム會議において議長的な役割を果たしていたことが分かります。ですから、教会の大切なポストに彼が就いていたことは明らかです。また、パウロが話していることからヤコブのことが少し分かります。使徒21章を見ると、パウロたちが第3次宣教旅行の際にヤコブを訪問していることが書かれています。18節に「次の日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこには長老たちがみな集まっていた。」。また、ガラテヤ1：19には「しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒にはだれにも会いませんでした。」とあります。確かにヤコブは12使徒の一人ではありませんでしたが、パウロがそうであったように彼は使徒にもふさわしい信仰者だったのです。使徒というのは、イエス・キリストの復活を目撃した人です。ヤコブもそれを目撃しています。Iコリント15：7に「その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。」とあるとおりです。肉体

をもってよみがえられたキリストを彼も実際に見ているのです。このように人々の様々な証言を見ると、ヤコブが霊的なリーダーであり、重要な働き人であったことを私たちも知るのです。

同時に、イエスの兄弟たちの変化を覚えておきましょう。イエス・キリストが地上におられたとき、ヤコブはイエスを信じていませんでした。ヨハネ7章を見ると、彼らがイエス・キリストのもとに来てこのようなことを言った様子が書かれています。7：2－5「さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。：3 そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるように、ここを去ってユダヤに行きなさい。：4 自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行なう者はありません。あなたがこれらの事を行なうのなら、自分を世に現わしなさい。」：5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」、イエスとともに生活をしてきた彼らはイエスを信じていませんでした。ところが、ペンテコステの日、使徒1章にその時のできごとがありますが、そこを見ると彼らは変えられていました。1：13－14に「彼らは町にはいると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった。：14 この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。」とあるように、兄弟たちは後にイエスを信じたことが分かります。

これがみことばを通して私たちが知ることができるヤコブの人物像です。今度はヤコブ自身のことばに目を留めて見ましょう。彼が自分のことをどのように表現しているのでしょうか？

ヤコブ自身から：ヤコブの手紙1：1をご覧ください。「**神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、**」と、ヤコブはここで自分のことを「しもべ」と呼んでいます。つまり、奴隷ということです。奴隷はすべてのことを主人のためにします。良い奴隷は自分の願いは横に置いて、ただ一つのこと「主人に喜ばれることをしたい」というのが彼の願いなのです。自分は神とイエスの奴隷であると言うヤコブは、自分が何のために生かされているのかをよく知っていたのです。キリストのしもべである以上、自分が生きて行く目的は神に喜ばれることであると。そのことをヤコブはここで私たちに教えるのです。「**神と主イエス・キリストのしもべ**」と記されているところは他にありません。ヤコブは主の兄弟でありながら、そのことにはいっさい触れていないし、自分は使徒にふさわしい者だとも言っていない。私はただ主の奴隷だと言っていないのです。しかし、彼がほんとうに霊的な人物であったこと、教会の重要なリーダーであったことを伺い知ることができるのは、このわずかのことばの中に、彼がどのような思いをもって主を見ていたのか、そこに明らかです。ヤコブはここで「**神と主イエス・キリスト**」と並列に記し、同等であること、つまり、イエス・キリストは神であることを明らかにしたのです。また、イエスに対してキリストという称号を使っています。イエスは自分たちが待望している救世主、メシヤであることを彼ははっきりと確信していたのです。自分の兄弟であったイエスをキリストと告白するのです。ここで「主」ということばが使われています。「主」という称号はイエス・キリストに対して与えられているのですが、この当時、このことばはローマ人たちによって用いられていました。どのように用いたのでしょうか？彼らはローマ皇帝を崇拝していたのです。皇帝を主と呼んで、神として崇拝していました。そして、ヘブル語で記された旧約聖書のギリシャ語訳である70人訳を見ると、旧約聖書の中に出てくる「神」のお名前、エロヒム、エホバという名前が「主」と訳されています。ということは、ヤコブがここでイエスを「主」と呼んだということは、イエスがエロヒムであり、エホバであり、まことの神であることを証しているのです。イエスが救世主であるだけでなく、この方は聖書が教える、自分たちが信じてきたまことの神だということを証言したのです。

さて、この手紙をヤコブはだれに宛てて送っているのでしょうか？1節の後半に書かれています。「**国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。**」と。ヤコブはイスラエルの12の部族、すなわちユダヤ人たちにこの手紙を送っているのですが、ここで「**国外に散っている**」とあります。これはパレスチナ以外の土地に移り住んでいたユダヤ人たちに送られていることを言っています。実際にこの当時、たくさんのユダヤ人たちがいろいろな所で生活していました。ヨハネ7章でイエスが『**あなたがたはわたしを捜すが、見つからない。**』また『**わたしのいる所にあなたがたは来ることができない。**』（7：36）と言われたとき、それを聞いていたユダヤ人たちはこのように言います。「**私たちに、見つからないという。それならあの人はどこへ行こうとしているのか。まさかギリシヤ人の中に離散している人々のところへ行って、ギリシヤ人を教えるつもりではあるまい。**」（7：35）。このように言うのはユダヤ人がいろいろな所に住んでいたからです。また、I ペテロ1：1にも「**イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、**」と記されています。彼らはメソポタミヤやペルシヤ、エジプトに住んでいました。なぜそのようなことになったのでしょうか？一番の原因は捕囚です。無理やりに連れて行かれたのです。先ほど話したヨセフスという歴史家は、そのことに関してこのように言っています。「**キレネ人(これは今のアフリカのリビア)のポリス(古代都市)には、四つの集団がある、**

市民、農民、第三に寄留外人、第四にユダヤ人である。ユダヤ人はすべての都市に進出した。そして、人の住み得る世界でこの民族を受け入れ、その力を感じしめない所を見い出すことは容易ではない。」と。世界のいろいろな所に出かけて移り住んだのです。ですから、ヤコブはそうにあちこちに住んでいるユダヤ人たちにこの手紙を送ったのです。

もう一つ付け加えるとしたら、この手紙を送られたユダヤ人たちはクリスチャンでした。イエス・キリストを信じているクリスチャンたちでした。彼らはなかなかユダヤ人意識を捨てられなかったのです。その影響を強く受けていたからです。

ヤコブは**なんのために**彼らに送ったのでしょうか？彼は、信仰ゆえの試みと刑罰、様々な迫害に遭遇している、また遭遇しかけているそのクリスチャンたちが、ますます主に対して忠実に歩み続けて行くことを願ってこの手紙を送ったのです。ヤコブが願ったことは、迫害に遭遇し始めているこのクリスチャンたちが、また、ユダヤ人の影響をかなり受けている彼らが、その中にあってもしっかりと神を見上げて、信頼を持って正しく歩み続けて行くようにということでした。そして、彼らを励まそうとするのです。ヤコブは彼らが経験するいろいろな問題を十分に理解していました。なぜなら、彼自身、そのような迫害を経験していたからです。2節を見ると、彼がこのクリスチャンたちを励まそうとしていたことが明らかです。**「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、」**と記されています。ヤコブは私はあなたたちの苦しみがわかるよと彼らを励まそうとしたのです。彼らに対するあわれみをもって彼らを励まそうとするのです。なぜなら、彼らのことを**「私の兄弟たち」**と呼んでいるからです。このことばはこの手紙の中に8回も出てきます。**「兄弟たち」**ということばは15回あります。ヤコブはこのようなことばを使うことによって、あなたたちは私にとって愛する兄弟だ、家族だ、あなたたちの痛みも苦しみもよく分かるし、実は私自身も経験していると言います。兄弟として彼らにこの手紙を送るのです。それはヤコブが彼らのことをどれほど強く思っていたかを裏付けるものです。

同時にヤコブは、この迫害が確実に訪れるというその確率性をもってこの読者たちを慰め励まそうとするのです。試練というのはすべてのクリスチャンに例外なく必ず訪れるものだと言います。クリスチャンなら皆経験することだと。なぜなら、**「さまざまな試練に会うときは」**とあるからです。「もし試練に会うなら」という仮定法を使っていないのです。必ず試練は訪れると言うのです。

もう一つ、ルカの福音書に良きサマリヤ人の話があります(ルカ10:30～)。ある人がエルサレムからエリコに下る途中で強盗に襲われます。この「襲われた」ということばと今見ているヤコブの「試練に会うとき」が同じことばなのです。「襲われた」ということばの意味は、強盗によって取り囲まれている、強盗が自分を取り囲んでいるということです。複数の強盗がその人の周りを取り囲んでその人から金品を奪って行ったということです。ヤコブ1:2でその同じ意味をもったことばが使われているということは、試練というのは私たちの周りを取り囲んでいるということをヤコブは言っているのです。いつ試練が私たちに起こるかも分からない、それほど頻繁に起こるものであると。それは、私たちには自分の生活を見るときによく分かることです。いろいろな試練が次々にやって来ます。

実はその後です。続いて**「…それをこの上もない喜びと思いなさい。」**とあります。ヤコブがここで言ったことは、今現在、迫害の中にいる、困難の中にいる人々に対して、その試練を喜びなさいと命じているのです。命令です。ヤコブは大変なことを言っている、それは無理なことと私たちは思うかもしれませんが。ヤコブは実現不可能なことを命じている、そのような命令は私には重荷ですと。苦しい時や悲しいときに喜ぶことは無理だと。しかし、このみことばを見るとヤコブはそれだけではなく、**「この上もない喜び」**と言っています。このことばはギリシャ語では「この上もない、喜び、思いなさい」と並んでいます。初めに「すべて、喜び」と「喜び」が強調されています。とともに、ここで言われている「喜び」というのは100%の喜びです。この同じことばをパウロが書いた手紙の中に見付けることができます。ピリピ2:29です。**「ですから、喜びにあふれて、主にあって、彼を迎えてください。また、彼のような人々には尊敬を払いなさい。」**と、この**「喜びにあふれて」**と記されているこのことばが**「この上もない喜び」**ということばと同じなのです。パウロが言ったことは、パウロが愛し、また、すばらしい信仰者であったエパフロデトをピリピに送るから、彼を迎えてほしいということです。パウロが期待したことは、混ぜ物のない喜びです。半分喜び、嫌さ半分というようなもの、8割喜びがあっても、あとの2割は義務で迎えようとしている、そのような心の態度で彼を迎えてほしくない、心の中が喜びだけで満たされた状態でと言っているのです。ヤコブが言っていることも実はそのことです。100%の喜びをもって神を称えるということ、そのような喜びをもって感謝することを命じているのです。私たちが試練の中にいるときに、その試練に対してあれこれ言わないで、神を疑ったり文句を言ったり不信感をもったりしないで、100%の喜びをもってと言うのです。

パウロはまさにこの喜びをもって試練を通して来たのです。彼は肉体的な苦しみを負いました。それ

が何であったのかはよく分かりません。何かの病気であったと言われていますが、パウロは「とげ」と表現しているその病を受けたとき、感謝します！ではなく、この病を取り除いてほしいと祈りました。3度祈りましたが、4度は祈らなかったのです。パウロは実はこの病が神から自分に特別に与えられたものだということが分かったからです。病、とげが無くなったのではないのですが、彼はその中にあって神に喜びを、感謝を表わすことができたのです。また、パウロは投獄されるような目に会っても、死を覚悟するようなことがあっても、彼は喜びをもって生きていたのです。

ペテロもそうです。先ほど見たように彼も牢の中にあって鎖につながれていました。もうヤコブはすでに殺されていました。この手紙のヤコブとは別の人物ですが、明日は自分の番かもしれないというとき、ペテロは眠っていました。御使いは彼を起こさなければならなかったのです。それほど熟睡していたのです。彼は平安のうちにあったからです。

彼らは試練の真っ只中であっても、100%の喜びを神にささげていたのです。ここで言われていることは不可能なことではないのです。だから、私たちがこれから学んで行くべきことは、どうすれば、パウロがそうであったように、ペテロがそうであったように、ヤコブがそうであったように、そして、多くのクリスチャンたちがそうであったように、私たちも周りを取り囲んでいる試練の只中であって、100%の喜びをもって神を称えて行けるのかということです。

☆どうすれば100%の喜びをもって生きて行けるのか？

試練の目的をしっかりと覚えることです。それは私たちが信仰者として成長して行くためです。クリスチャンとして成長するために試練を与えると神はいわれるのです。この「試練」ということばは、辞書を見ると二つの大きな意味があります。（1）悪い行ないへと導いて行くこと、そのような試みであり試練です。パウロはそれを「誘惑」と訳しています。Iテモテ6：9に「**金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。**」とありますが、ここにある「誘惑」ということばが、今見ている「試練」と同じことばなのです。ですから、「試練」ということばには、明らかにこのように悪へと導いて行こうとする試みがありますが、その場合は日本語の聖書も「誘惑」と訳し、「試練」とは訳さないのです。もう一つの意味は、（2）有益な目的と影響をもった試みです。外側から来る様々な苦しみ、特に迫害は大切な意味をもっているというのです。また、辞書はこのようにも訳します。それは神によって許可された、神によって送られたものであると。そうすると、ヤコブの手紙1：2でいっている「試練」は、私たちが外側から受ける様々な苦しみのことで、実はそれは神が私たちに与えてくださるものだということをヤコブは言っているのです。そのことを覚えていなければいけないと言います。旧約聖書を見ると、旧約の人々はいろいろな機会に神から試練を受けています。たとえば、アブラハムが自分の子、イサクを殺せと命じられたとき、神は何を望んでおられたのでしょうか？なぜそのような命令を与えたのでしょうか？みことばが教えることは「神はアブラハムを試練に会わせられた」ということです。なぜでしょう？アブラハムの信仰がそれによって成長するためです。

イスラエルの民が約束の地へ入って行きました。神はその地に存在した様々な異教を、また異教徒をそのままにしておかれました。何のためにそのような状況に彼らを招き入れられたのでしょうか？確かに、それによってイスラエルはいろいろな失敗を犯しました。それは神がイスラエルの人々を試みるためです。それによって人々の信仰が成長して、彼らがもっと神を愛する者に、主に忠実に従う者に変えられて行くためです。ですから、ヤコブがここで言っていることは、この試練というのは私たちの信仰が成長するために神が与えてくださったということです。そして、私たちが日々経験する試練、それはいろいろな種類がありますから、「さまざまな」というのです。「さまざまな」とはいろいろな色です。たとえば、迫害といっても同じような迫害はありません。置かれている環境がそれぞれに違うからです。いろいろな問題といっても、よく似てはいても全く同じではありません。試練はいろいろな色をもっているというのです。なぜそのように言うのでしょうか？それは神が私たちの弱さを知っておられるからです。神は私たちにふさわしい、私たちに必要な試練を知っておられ、それを与えてくれるのです。だから、私たちはいろいろな試練に会うときに、これは私が成長するために神が与えてくださったのだということをしっかりと覚えることが必要なのです。私たちはいろいろな試練を経験します。たとえば、肉体的な試練、病気があります。病気の中にも祈っても祈ってもなかなか癒されないような、長期に患っている病があります。怪我もあるでしょう。また、体の衰えというのもあります。精神的な面を考えたときに、孤独を経験している人もいます。人からのいろいろな批判を受けている人もいます。もしかしたら、自分の周りの人は自分のことを嫌っているかもしれない、いじめを受けている、いろいろな圧力、何かを強制されているなど、いろいろなことがあります。そして、そのような試練の中にあるとき私たちが言うことは、この病さえ何とかなれば、この怪我さえ治ればとか、あの人がいなければ、もう少し近所がいい人たちであれば、住んでいる環境がもう少し良ければとか、自分の伴侶が

もう少しましだったらとか、いろいろな条件を挙げるのです。そのようなことを言っている間は、わたしたちはヤコブが言っている本当の喜びというものを得ることはできないのです。私たちは喜びを邪魔するものがなくなったときに喜べると言っているのですが、神は試練の真っ只中で喜びなさいといわれるのです。だから、その喜びが世の中に大きな影響を与えたのです。死を迎えている人がその中で神がくださる喜びをもって生きたのです。絶望のどん底にいてもおかしくない人がその中にあって希望をもって生きたのです。人々はそれを見て、なぜあなたはそうに生きることができるのかと不思議に思ったのです。その生きざまが人々に大きな影響を与え、大きな証となって行きました。

今あなたは大変な状況に置かれているかもしれませんが。でも、もしあなたがその状況から解放されたら喜びを得ることができると思っているなら、それは大きな間違いです。神は私を愛して、私のためにあえてこの試練をくださった、この病をくださった、このような隣人を与えてくださった、このような環境を与えてくださった、そのことを私たちは覚えなければいけないのです。私たちは問題からの解放を感謝するのではなく、その問題を感謝するのです。喜べない環境で感謝すること、感謝できない環境で感謝するのです。試練は私のため、私の信仰が成長するために与えられたのです。だから、2節の終わりに「…喜びと思いなさい。」とあるのです。これは考えるとか、見なすという意味です。しかも命令形です。意志に語りかけているのです。様々な試練に会うときに、私たちがしなければいけないことは、これは神が私を愛するゆえに私のために与えてくださっているものだと思わなければいけないのです。そのように考えるのだと。そのときに私たちは変えられて行くのです。

このように私たちはみことばから、どのように試練に対して立ち向かって行くべきなのかということをお教えされました。試練は私のためであると、それを覚えるときに私たちは「主よ、感謝します。なぜなら私はあなたの約束を信じているから、あなたのことばを信じているから。どうぞ私が学ばなければならないレッスンをしっかり学び、この中にあってもっとあなたを愛する者に変えられますように、私の弱い信仰が成長しますように、」と心から言うのです。主はそれを使ってください、私たちを成長させてくださいます。そのようにしっかりと目的を覚えることが必要だと主が私たちに教えてくださったことです。どうぞ、そのことを覚えてあなたが今置かれているところを生きてください。そして、その中で心から100%の喜びをもって主を称えることです。そうするとあなたは変わってきます。世に影響を与える者になってきます。でも、それはあなたがそのように選択し、そのように歩み始めることによって始まるのです。